

近代日本における縄文土器の受容 —— 文様から全体造形への階梯

鈴木 希帆（武蔵野美術大学）

縄文土器が美術全集に本格的に取り上げられたのは、岡本太郎（1911-1996）の「縄文土器論」（『みづゑ』558号、1952）を契機とする。この文章は、四年後には抽象彫刻を例に縄文土器の空間感覚に対する評価が加筆され、単行本『日本の伝統』へ収録され一般へと普及する。ここで取り上げられた縄文土器は、粘土の貼付けや波打つ口縁部からなる“動的”な造形表現を特徴とする縄文中期の土器が中心であり、以来、原始的な狩猟採集民による呪術に根差した造形様式として、弥生土器の“静的”な造形表現と対比されていくことになる。

しかし、縄文土器の造形性に注目した言説はすでに19世紀後半から始まっており、1876年のフィラデルフィア万博においては、日本陶磁史の最初を飾るものとして海外へ紹介され、また近代考古学の始まりとされるE・S・モース（1838-1925）の発掘報告書『大森貝塚』（1879）においてもその造形性が指摘されている。その後、縄文土器に触発された造形表現もいくつか見られるようになり、蓑虫山人こと土岐源吾（1836-1900）は素朴ではあるが旧来の図譜とは異なる様式で縄文土器を描き、好古家のサロンの会誌『集古會誌』（1896）では東京美術学校に学んだ岡田村雄（1874-1911）による縄文土器を図案に用いた表紙も採用された。同じ頃、理科大学人類学教室の画工に始まり考古学者となった大野雲外（1863-1938）の『模様集 石器時代第一、第二』（1895）に始まる三図案集が出版され、土器の文様は鮮やかな色面構成の作品に変貌した。いっぽう、図案家・杉山寿栄男（1884-1946）の膨大な拓本と写真からなる『原始文様集』（1923）に始まる文様集では、立体を展開図で示し、そこから装飾文様化が試みられた。大野や杉山らの縄文土器に取材した表現に共通する特徴は、文様への強い関心である。実際に対象とされた縄文土器も、岡本の場合と異なり、細部に視点が誘導されるような、器形の動きが少なく文様帯が明瞭に表された縄文後期・晩期の土器が中心であった。

このような近代における文様化への傾向の背景には、一つには様式的視点による考古学上の編年研究の発展、また一つには文様集や装丁に見られる当時の美術出版の興隆が挙げられ、それを受けて縄文土器に対する平面的な造形観が促進されていったと推測される。この文様という二次元での造形把握から半世紀後の岡本による三次元の全体造形としての把握に至るまでには空間への関心、さらにはモダニズムを経た前衛芸術家の視点が必要であった。

本発表では、上記した近代における縄文土器への視点の変遷を、実物の土器との比較によって具体的に検証し、そこに見られる取捨選択の原理を伺い、それを踏まえて近代における縄文土器の造形観を明らかにする。さらに、縄文土器の文様化、すなわち二次元化の限界を、新たな時代の全体造形としての縄文土器観の誕生要因の一つとして考察する。